

インフルエンザと溶連菌感染症を併発した 伝染性単核球症の一例

宇野 真莉子 宮本 真理子 岡 良和 山村 幸江 吉原 俊雄
東京女子医科大学病院 耳鼻咽喉科

伝染性単核球症はEBウイルスの感染による炎症性疾患であるが、他の感染症を併発する。今回インフルエンザ感染が先行し、伝染性単核球症を発症。また、扁桃培養から溶連菌が検出された1症例を経験したので報告する。症例は19歳女性。2011年1月より咽頭痛出現。2月2日より発熱、咽頭痛が増悪し近医受診。インフルエンザA型陽性、口蓋両側扁桃の発赤、腫脹を認めたため、リレンザ、フロモックス3錠、カロナルを処方された。症状悪化し経口摂取困難となったため2月4日当科紹介初診となった。両側口蓋扁桃は2度腫大、膿栓付着、頸部リンパ節腫脹を認め摂食不可のため当科緊急入院となった。採血ではWBC17300、CRP1.05と炎症反応高値とAST137、ALT183、LD573、 γ -GTP110と肝機能障害を認め伝染性単核球症が疑われた。EBV-VCA IgG320倍、EBV-VCA IgM40倍と上昇を認めた。また、扁桃培養からC群 β -streptococcusが検出された。ホスミシン2g×2点滴と補液、肝機能障害に対してはウルソ300mgを開始。安静と点滴加療にて症状、所見ともに改善傾向を認め抗菌薬を内服へ切り替え退院となった。